

われもこつ 第25号

2008年7月16日 発行

十年前、
新幹線開通工事にもなつてできた空地に、
野の花を植えましたのは、
軽井沢らしい風景を取り戻せたらいいなあ……
と思つたから。
松虫草、おみなえし、桔梗、ゆうすげ、われもこつ……
昔から咲いていた花々が風に揺れる野原。
宿根草が根を張るように、
花が咲くまで何年もかかるように、
少しずつ仲間が増えていきました。
合言葉は「空地に花を！」
野の花を増やす会 われもこつの会ができて
十年がたちました。



野に響く鳥たちの流行歌p.2

軽井沢の油糧植物 いくさのはなしp.4

タヌキのストーカーが祖母(!?) になった日p.5

軽井沢の貴重な植物 —ウメガサソウ—p.7

野に響く鳥たちの流行歌

石塚 徹

金沢大学大学院(自然科学研究科)
元ピッキオ研究员

鳥の声といってもカテゴリーはいろいろで、チツとかグエツなど、「思わず出てしまう声」は、本能的にインプットされたものです。実は、フクロウ、ハト、キジ、カツコウなどは、「歌」でさえ、このお決まりの声です。だから、カツコウは誰に教わるともなく、全国どこへ行っても「カツコウ」なのです。

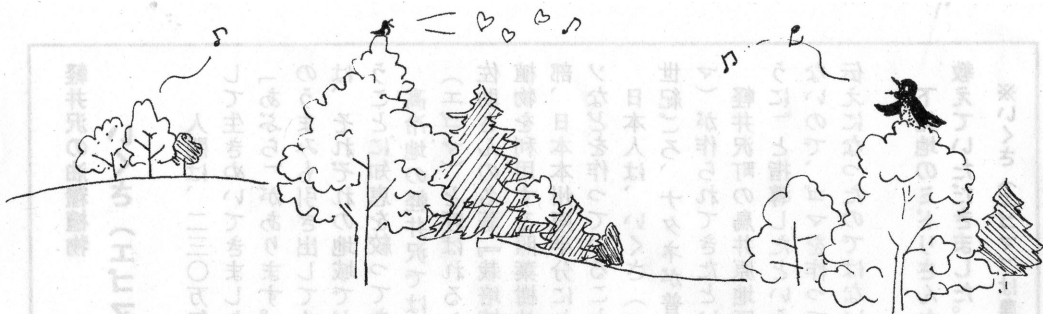
一方、小鳥たちはもつと複雑な鳴き声を持ち、方言さえあります。彼らは学習、つまり親やよその大人の声を聞き覚えて鳴く、脳の神経回路を持っているのです。ふつう、幼いときに覚えた歌を、翌年になってから歌えるようになります。大人になってから覚える能力は、種類によって差があるようです。

正確におぼえる能力と、はからずもアレンジしてしまう習性の結果、地域の流行歌(方言)のほかに新曲も生まれ、一羽一羽が何曲かのレパートリーを持ちます。一羽のウグイスでも、微妙に違う数曲の「ホー

ホケキヨ」を持ち歌にしています。

私が長年つきあっている夏鳥のクロツグミは、なかなかの歌い手です。一羽が二十種類もの笛のような音節(「キヨホー、キヨホー」とか「フィリツ、フィリツ」等々)と、百種類近いきしみ音(「ツリリン」とか「ギーツ」等々)を持っていきます。そしてそれらを組み合わせる歌にし、多くのレパートリーを持ちます。

ある年、Fという森に、聞き慣れない鳴き方のクロツグミが渡ってきました。クロツグミは歌の方言がはつきりしているので、よその出身者はすぐわかります。そして羽の色から、彼が満一歳の若い雄であることもわかりました(鳥に足環(あしわ)をつけて調べると、ふつうは三、四歳が寿命。最高で八歳)。彼はきつと渡りの途中なのだろう、数日で北へ旅立っていくだろうと思っていたところが、そのうち彼のところにお嫁さんが来てしまいました。



雄の鳥にとつては、ふるさとに帰ることよりもお嫁さん優先なのでしよう、彼はF森に居着いてしまいました。そして夫婦仲よく子育てに精を出し、一夏を過ごしたのです。

彼が私の印象に深いのは、その一夏の間、持っていた歌のすべてを取り替えたためでした。四月に十一曲あつたレパートリーを二カ月ほどの間にすべて捨て、F森でもっとも流行っていた二曲を覚え込んだのです。最初はぎこちないものでしたが、夏の盛りには何とか歌らしくなりました。

人間的に言えば、F森の人間関係になじむよう、方言を取り入れたといったところでしょうか。でも、せつかくよその歌を歌っていたときに雌にもてたのに、その後、それらを捨ててしまうなんて……。進化生態学的には、面白いとだけでは済まない深い理由がありそうです。

難しそうな理屈はさておき、十一曲を忘

れ去らなければ覚えられなかった二曲が、彼の持ち歌のすべてになりました。脳の神経の限界だったのかもしれませんが、ただ、日々練習をくり返す彼の姿を思い出すと、何だか胸が詰まるような気さえします。

翌年、彼はF森に帰ってきませんでした。歌の稽古に神経をすり減らし、寿命を縮めてしまったのか、はたまた、よその森でまた新たな一步を踏み出したのか、それはわかりません。

鳥のさえずりにも、美しいとか上手い・下手だけではない、一羽一羽の人生が歌われているのです。

残念なことに、現在、F森のクロツグミたちはみな姿を消し、この森の文化とも呼べたユニークな流行歌の数々は、この世から永遠に消え去ってしまいました。彼がよその森で、あの二曲を伝えてくれていなければ……。

タヌキのストーカーが祖母(!?)になった日

福江佑子 (日本哺乳類学会会員)

初夏。哺乳類でも子育ての季節です。ネズミなどを除く多くの日本の哺乳類にとっては、年に1回限りの子育てシーズン。この時期を逃すと交尾、出産できるのは来年です。ここでは、私の観察してきたタヌキの子育ての一部を書きたいと思います。

私は学生の頃、タヌキに発信機をつけて追跡していました。発信音をたよりに数十m離れた所から個体の位置を地図に落としますが、まるでストーカーです。クロと名付けた若いオスを夜ごとストッキングしていましたが、彼は交尾期(3月)になると自分が生まれた場所を離れ、新しい場所に入っていました。あれ?と思った時には、すでに彼にはお嫁さんがいたのです。後から捕まえたそのメスには、ヒメという名前を付けました。タヌキは一夫一妻ですが、一夫一妻という繁殖のしかたは哺乳類では非常に珍しく、全体の3~5%にすぎません。その点からいうと、タヌキはヒトよりも珍しい繁殖様式を持っているのです(ヒトの場合は社会的制約による一夫一妻制なので)。

忘れもしない5月17日、いつもクロ、ヒメそろって移動していたのが、真夜中過ぎってから、木々が生えている斜面から全く動かなくなりました。死んだのではない

かという恐怖感がありました。しばらく様子を見ることにし、朝6時には一旦調査を終えました。午後、彼らはまだその場所から動いていません。夜になって、今までの仲睦まじい連れ立ち行動から一転、ヒメを残してクロだけがその場を離れる、またはクロだけを残してヒメだけが離れるといった行動をとり始めました。なんと、ヒメは出産し、交代で子育てを始めたのです。クロにとっては、生まれて初めての子育てです。私はクロの親になった心持ちで、子育てが心配で心配でしょうがありませんでした。

子育ても半ばに入った6月、出産した穴のそば(彼らが気にしない距離)にテントを張り、三日三晩の観察に入りました。子育てに携わる時間が雌雄同じなのか調べるためです。その結果、オスもメスも同じくらい頑張っていることがわかりました。観察終了後、本当に子どもが育っているのか心配だった私は、二親ともいない時を見計らって、とうとう穴の中を覗いてしまったのです。15×20cmくらいの小さな穴を上から覗くと、黒いやわらかな毛が動くのが見え、「うわあ」と思わず声をあげてしまいました。バンザイ!とクロとヒメを讃えた瞬間でした。



軽井沢の油糧植物

いくさ(エゴマ)のはなし

人間は、二三〇万年の歴史の中で、いろいろな植物を利用して生きぬいてきました。人間の健康にとって大切な食べ物に「あぶら」があります。効率的な熱量になる「あぶら」は、味のうまみも引き出してくれる大切な食べ物です。だから、人々は、それぞれの地域でどうやって「あぶら」を確保するかということに知恵を絞ってきました。

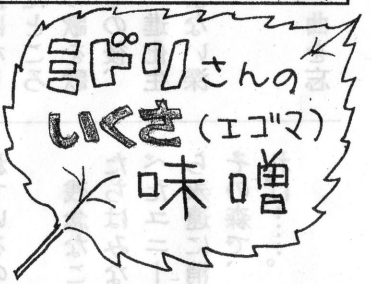
高冷地の軽井沢では、ゴマやナタネは栽培されず、いくさ(エゴマ)と呼ばれるシソ科の植物を栽培してきました。中尾佐助さんの名著『栽培植物と農耕の起源』によると、シソ科の植物を利用する照葉樹林文化は、ヒマラヤ南面中腹から中国南部、日本本州南半分にわたる地域で、チャ、キリ、ウルシ、シソなどを作っていることで特色づけられているそうです。

日本人は、いくさ(エゴマ)を古くから栽培しており、一七世紀ごろ、ナタネが普及するようになる前は、いくさ(エゴマ)が作られてきたという由緒ある植物だったのです。

軽井沢町の鳥井原地区では、弘法大師が「ゴマを作らないように」と指導したという言い伝えがあるそうです。気温が高くないので、ゴマを作ってもうまく作れないので、こういう言い伝えになったのではないのでしょうか。

下寮地のミドリさんから、この由緒ある、いくさの料理法を教えてくださいました。是非、お試しください。

※いくさ(エゴマ)は農協直売所などで手に入ります。 今城治子



① いくさをフライパンで煎る。パチパチはじける音がしたら火からおろす。

② ①をすり鉢でする。(しっとりするまでですると、口当たりがいいです)

③ 鍋にすったいくさ、材料を全部入れて混ぜる。

④ 鍋を火にかける。中火でふつふつとしてきたら弱火にし、とろみが出たら火からおろす。

◎ 冷蔵庫で2週間程度保存できます。

◎ 好みでくるみを一緒にすって入れるとコクが出ます。

★いくさ味噌を使って夏のめん料理

薄めのめんつゆを用意し、茹でためん(うどん・そうめんなど)にかけ、いくさ味噌をのせ、まぜて食べます。お好みで大根おろしを添えて下さい。



—材料—

- いくさ.....50グラム
- 砂糖.....60グラム
- (味噌の塩分と好みで調節してください)
- 味噌.....大さじ2
- 酒.....大さじ2
- みりん.....大さじ1
- 塩.....小さじ1/2

？マークの葉っぱは見守るべし

友からオミナエシの苗をわけていただいた。夏には黄色い花が見事に咲き地味な庭に輝くばかりの色を添えたものだった。

翌年、オミナエシの芽が出てきたときは良くぞ忘れずに出てきたものと小躍りしたものだ。ところがよくよく見ると、根元に違う葉っぱがはびこっているではないか。あわてた私はきれいにむしり取りこれですっきりしたとほっとしたのもつかの間、下にびっしりと生えていた雑草と思しきものはオミナエシそのものの葉っぱだったのだ。

そりゃないだろう。一つの植物に全く違う葉っぱが生えているなん

て、そんなのありか。ありだったのである。このときは期待が大きかっただけに、また、苗を下さった方への申し訳なさにへなへなとへたり込んでしまった。

それでも、私の難から逃れたものが生き残り、今年もけなげに芽を出した。

この事件から、私はむやみに葉っぱを雑草と思ってとってはいけないことを学んだ、？マークのついたものは、早急に結論を出さないで気長に見守ることだ。これが山野草の庭を始めてから最初にたどりついた黄金律である。

さて、オミナエシは、なかなか優れものである。まずは花の期間が長く、葉が小さいため、徒長しても倒れることはない。私の連れ合いなどは、近眼であることに加えて近頃は老眼の度が進み、小さい花は近寄っ

たり天眼鏡がないと見えないのであるがその点オミナエシは、どんなところからも、その存在を確認しえる。早い話に、われもこうの会が市村記念館の前に見事なオミナエシの花畑を作ったのもむべなるかななのである。

K T



「われもこう」会員である矢代静一氏の娘さん朝子さんが、機関紙「あけぼの」の対談記事の中で、「われもこうの会」について触れてくださいました。対談の相手は、俳優で、日本野鳥の会会長の柳生博さん。テーマは「**確かな未来はなつかしい風景の中に**」——嬉しくなるテーマですね。A H



トチの実 は 精羅 で 美味 し ぞう。

そこで豊作だった昨秋、あく抜きにトライした。

- ① 熱湯をかけ皮をむく
- ② 3日間水にさらす、その間、何度も水を取り換える

- ③ 熱湯を注ぐ
- ④ 湯を切り、実と同量以上の灰を加える。沸騰した熱湯をかけ、

- ⑤ 2日間置く
- ⑥ ゆでる

の順序で、試食したところ、えぐみがとても強く食べられたものではなかった。薪ストーブの残り灰はたっぷり用意したが、水にさらす時間がまず不十分であったと思う。縄文人は谷川の水で充分、川ざらしをしたのであろうし、知恵と工夫を想像して脱帽した。動物もクリ、クルミが不足した時にやむなくトチを食べるというが不味くて可哀そう。お粗末な顛末であった。

洋子



軽井沢の貴重な植物

ウメガサソウ (イチヤクソウ科)



明るい林内に生える。高さ5～10cm位。葉は深緑色で白い中筋があり、ふちに鋸歯がある。6～7月に径1cm位の白い花を下向きにつける。

三年前の春、林の際に蕾をつけたウメガサソウを見つけました。咲くのを楽しみにしていたら草刈機で根元から刈られてしまいました。翌年小さな芽を出しましたが、又もや草刈機の犠牲になり、それっきり姿を見ることはありませんでした。

先日散歩をしていたら大きな寮の生垣の下陰にウメガサソウを見つけました。咲き終わったのが二株、丁度見頃の花が一株咲いていました。十センチ位の草丈に数輪うつむいて咲く花は地味ですが、気品があります。

「こんな所に生きていてくれたの。」嬉しくて涙が出そうになりました。草刈機が入らない場所だから、きっとこのまま生き続けてくれるでしょう。

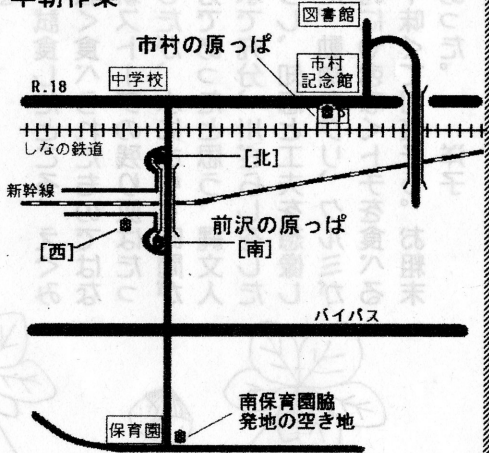
「元気でね」と声をかけてその場を離れました。

＼YK＼

原っぱでボランティア!

われもこうの会 2008年夏から秋のスケジュール

- 8月 6日 (水) 前沢の原っぱ[西]…早朝作業
- 24日 (日) 前沢の原っぱ[西]
- 9月 10日 (水) 市村の原っぱ
- 28日 (日) 発地 南保育園脇
- 10月 15日 (水) 前沢の原っぱ[西]
- 26日 (日) 発地 南保育園脇
- 11月 9日 (日) 前沢の原っぱ[西]



*集合時刻は午後1時30分

ただし8月6日は早朝作業、
6時30分に集合してください。

*小雨決行、雨天の場合は中止。

*持ち物：日除けの帽子、園芸用手袋、スコップや鎌、お茶タイム用Myカップ

*会員以外の方の参加も大歓迎です。

伝言板

ライ麦刈りボランティア募集!

町内の環境NPO 軽井沢サクラソウ会議と発地の農家との共同プロジェクト「休耕地でライ麦を作ろう!」に参加し無農薬ライ麦を1kg GETしよう!

7月26日(土) 午前9時風越公園グランド駐車場集合
お昼ごろまで。手で刈り取り作業、簡単です。

※雨天のときは1週間順延。〈当日の変更はHP掲示板で〉

◆軽井沢ふるさと探検隊「湯川公園で川遊び」8/9(土)
参加者募集中。先着順です!

詳しくはサクラソウ会議のホームページをご覧ください。

<http://www18.ocn.ne.jp/~sakuraso/>

〈問合せ先〉軽井沢サクラソウ会議事務局

TEL&FAX: 0267-48-3512

Email: sakuraso@ninus.ocn.ne.jp



編集後記

庭仕事の合間に、木陰のテラスでアイ스티ーでも飲みながら、読んでほしい「われもこう」です。(優雅～!) 次号は来年2月発行予定。この夏の出来事、庭自慢、山野草に関する質問など、お便りお寄せ下さい。Eメール;

forest@ksj.biglobe.ne.jp

またはファックス;

下記事務局まで。

われもこうの会の

ホームページもご覧ください

<http://www.h5.dion.ne.jp/~waremoko/>

発行/われもこうの会

事務局

TEL・FAX/ 0267(46)2505